

和 文 要 旨

本論文は、全8章及び序章、終章、補論からなり、ベラルーシの作家スヴェトラナ・アレクシエーヴィチの証言文学『チェルノブイリの祈り』の構造分析を行うとともに、この作品が持つ文明論的な意味と暗黙の宗教的含意などを解明した研究である。しかし、たんに作品内に登場する証言の主題に内在した議論にとどまらず、たとえば作品分析の前提として、〈証言文学〉という文学ジャンルの新たな可能性を確認することも試みている。また「未来の物語」という副題を持つ本書が核以後の世界をいかに生きるかという問いをも投げかけているため、議論の最後には、おのずからチェルノブイリとフクシマを関連づけて考察せざるをえなかった。本論文は、本書の証言者たちによって、そうした未来をめぐる問いへのある種の応答がすでに先取りされているのではないかという論者独自の認識も提示した。

あらためていうなら、本書はチェルノブイリ原発事故にまつわる市井の人々の声を基盤とした「証言文学」である。1986年、ウクライナとベラルーシがまだソ連邦内の隣接する共和国であった時、ウクライナ側に建設されたチェルノブイリ原子力発電所で核爆発事故が起こり、ベラルーシはウクライナと同等以上の被害を受けた。加えて、放射能汚染の影響を取り除くことがほとんどできずにいた1991年には、ソ連邦自体が崩壊してしまった。アレクシエーヴィチは汚染地に向かいインタビューを繰り返し、被災した人々の苦悩を聴き取り、1997年に『チェルノブイリの祈り』という作品として上梓した。本書には、崩壊後もいまだソ連人としての記憶と心性を保ったままの人々が登場する。

アレクシエーヴィチ作品の全般について、それらがただ聞き取った声を並べたものに過ぎないのではないか、という心無い非難が投げかけられることがある。しかし、一読してみれば分かるように、彼女の作品はいずれも読み手の心を掴んで離さない豊饒な文学であり、そのようなものとしてすでに広く認知されている。なかんずく『チェルノブイリの祈り』には、その証言者の語り方のなかに、語弊を怖れずに言えば、崇高なまでの特異な雰囲気漂っている。証言を聴き取り、それから組み立てるといふ、見ようによっては素朴な成り立ちを持つこの文学形式が、これほどまでに私たちの心を動かす理由はどこにあるのか。①形式分析を試みることによって、②「証言文学」という視点を据えることによって、③そこに仕込まれている演劇的な形式に着眼することによって、さらには④多様な視点からの解釈を試みることによって、その理由を解き明かすことが本論文の目的である。

「序章」では、その謎を解くために、著者の他の作品と並べてみたときに『チェルノブイリの祈り』だけに認められる構造について論じている。第一に、作者は、自身もまた原発事故の当事者であることから、自分を証言者のなかに組み込んでいる。第二に、この作品には、他の彼女の証言文学作品とは違って、背景を説明したり、証言どうしを連結させたりする「地の文」とでもいふべきものがまったく見られない。そして第三に、この作品の証言を編集するにあたって、ある演劇的な枠組みが意図的に仕込まれている。とくに第三の点について、そのように考える手掛かりは、『チェルノブイリの祈り』の三つの章に後続する形で、

それぞれ「合唱」=コロスというパートが差しはさまれていることである。そのように、演劇的形式を密かに意識しつつ一書としてまとめ上げているのではないかと仮説的に考えたことで、作品の形式性をめぐるさまざまな考察が可能になった。

『チェルノブイリの祈り』という証言文学が、ただ証言を合算したものだという理解には与ることができない。そこには周到に仕掛けられた形式的な論点が隠されているからである。また、それに気づくことによって、ただ被害者の証言の悲惨さに圧倒されて終わるような読み方とは異なった読み方が可能になってくる。そこにある構造の分析を行うにあたっては、あえてバフチンの『小説の言葉』が提示している理論を援用した。バフチンによれば、ポリフォニックな散文における言語的多様性は、内的対話を活性化させ、脱中心化を促し、作品のテーマに沿って声をオーケストレーションする。そのような構造が、話者の言葉に社会的意義や社会的普遍性を獲得させ、作品の芸術性を高めるとされていた。対話が活性化され、話者の志向がより大きく屈折させられるほどの環境を持つという作品構造は、彼の理論に従えば、文学作品分析において最も重要視すべきことである。たしかに、バフチンの作品分析の典型的な対象は小説である。本来的な小説の形式からは、「証言文学」である『チェルノブイリの祈り』はかけ離れているように見える。しかし、本論文はあえてこの作品のなかでも、作家アレクシェーヴィッチが、小説作品の場合と同等の内的対話や多声的構造を（純粋なフィクションとは違ったレベルではあれ）作為的に仕込んでいるという仮説を立てた。またその実例を実証した。

本論文の第一の主題は、「合唱」=コロスという形式などが示唆している演劇的枠組みが、『チェルノブイリの祈り』の最外層の形式であると説明することにある。そのために、各証言間にどのような対話的効果が成立しているかを、個別の実例を挙げて説明した。また、選択された演劇的形式は、事件後の悲惨さを描いているかぎり悲劇の形式に関わるものと理解されがちであるが、実のところ、それは古典的な悲劇の形式すら脱臼してしまうような特異な形式なのである。演劇性という意識でその形式を考察したとき、そこにはいわばメタ悲劇とでもいうような崇高なドラマトルギーが産み出されているとすることができる。しかも、奇妙なことでもあるが、このメタ悲劇としての構造のなかには、部分的には滑稽な場面が数多く紛れ込んでいる。これらの意味についても本論文は検証している。

あらためて本論文の構成は以下のとおりである。

「第1章 『チェルノブイリの祈り』の構成」では、本書の内容を要約し、全体の構成を俯瞰する。次いで、本書が演劇形式を意識して組み立てられているという仮説に関して、「合唱」=古典古代劇の〈コロス〉にどのような効果が期待されているのかについて論じる。また、この章では『チェルノブイリの祈り』についての主だった先行研究を概観し、また著者そのひとについても論じておいた。

「第2章 証言文学であるということ」では、作品の具体的な分析に入る前に、証言文学とは何かについて考察した。証言文学が志向しているのは、歴史の中に消されていく個々の人々の記憶を残すことである。そこから集合的記憶が構成されることがあり、それはときに

は、「大文字の歴史」としての正史への対抗的な歴史叙述ともなる。証言文学は、亜流の文学などではなく、むしろ散文の限界を押し広げる可能性さえ持つ文学の一ジャンルであるということが、そこで与えられる暫定的な結論である。

「第3章 「愛する罪と愛による救済」のプロット」の「愛の救済」とは、最初と最後の証言者リュドミーラとワレンチナが、その愛によって夫たちに尊厳ある死を迎えさせようとした出来事に焦点を絞って考察している。「愛する罪」とはチェルノブイリ下で子どもをもうけることは罪であるという考えが抜きがたく存在することに関わっている。愛にまつわる証言を本文から抜き出して縦に並べてみると、そこに一つのサブ・プロットが浮上してくることに気づく。それは、女性たちが崇高なまでの愛によって意志することで、自分の主体性を核被害よりも優位に据えるという生き方である。

「第4章 証言間の対話」では、長大になるが、すべての証言をパラフレーズして内容を解釈することを試みた。一つの証言の前後の証言、あるいは離れたところに位置する証言とのかかわりや配置を具体的に見ていくことで、証言間の内的対話の可能性を考察している。証言の配置こそが、内的対話の発生と活性化の環境をつくるものであり、最も重要な本作品の美的技法である。さらに、章と合唱部分の相関性、相補性も検証し、三つの章と合唱のセットはそれぞれ何を中心に語られているかを整理する。結論を言えば、合唱部分は古典古代劇のコロスのように、章を補完し、上書きし、対話を醸成するものとして存在している。

「第5章 全体の流れと「ソ連民衆史」のプロット」では、前章でのセットごとの要約を縦に通して見ることで、「身体からロゴスへ」というメイン・プロットを浮かび上がらせることを試みた。振り返ってみれば、第一章は、世界が身体感覚で捉えられ、チェルノブイリの犠牲者である自分がいるという段階であるが、それが第二章では、チェルノブイリ世界や国家という対象が視界に入り始め、反対にそれが自分を映し出すという反省的な段階に進む。そして、第三章は、隠蔽体質や無策、欺瞞といった国家の真の姿を把握するとともに、外ならぬ国民自身がそのような国家を支え続けてもいたのだという気づきに至る段階である。すなわち、本書のなかの各章の配置関係は、アレクシェーヴィッチによって、過程的な運動体のように工夫されている。

そこにはさらに「ソ連民衆史」とでもいうべきものも浮かび上がる。ソ連邦のイデオロギー教育が国家に奉仕する身体を作っていたこと、国家はすでに弱体化していたが国民の犠牲的精神は残存していたために、多くの人々がわが身を危険にさらしてチェルノブイリの除染作業に奉仕したこと、そしてソ連崩壊とも相まって全てを自分で決定しなければいけないことに気づかされる時代に入って、自分たちは実に集団的な人間であったことに自ら覚醒するという段階が訪れる。本章では、これらをメイン・プロットともう一つのサブ・プロットとして確認することができた。

「第6章 演劇の形象」においては、古典古代劇の仕組み、しきたり、構成についてまとめるとともに、演劇であることの特異性と可能性を、あらためてアリストテレスの「詩学」を中心に、いくつかの現代演劇論の理論も踏まえながら整理する。本書は古典的な悲劇の形

式を持っていないばかりではなく、そうした悲劇そのものが解体したところで、メタ悲劇ともいうべき形式として成立している。

「第7章 タイトルのなかの「祈り」とは」では、改めて書名のなかの「祈り」はどのような内実を持つのかということについて考えている。この惨禍の中で生き抜く、生活者であり続けるという行為そのものが、すでに祈りとして立ち現れている。その底流には、ロシア民衆の正教に裏打ちされた精神性が見出される。あるいは、自分の経験を分析し、批判し、自分の真理が獲得される過程としての反省的思考としての祈りでもある。そして、チェルノブイリの世界で人々はどのように生きることが可能かというアレクシエーヴィチの抱く問いそのものが、全編を通底している作者の20世紀の祈りである。

「第8章 証言文学であることの必然性」では、証言が多くの場合に帯びている犠牲者としての聖性とともいうべき特異な姿について、あえて「神話的なもの」とも呼ぶべき契機が含まれているということについて考察する。

「終章」はこれまでの議論を整理する。本論文の課題である構造分析を行う過程で、『祈り』は、文明論的危機の問題を提示しているテキストであることが明らかになってくる。ここでは、チェルノブイリという悲惨な出来事の語りは、悲劇的な形式ではなく、むしろイロニーが通奏低音として響いているような、諧謔でさえあるような言語空間であった。アレクシエーヴィチは、そこに通常の悲劇のカタルシスを与えて終わるのではなく、むしろ喜劇が持つとされる、距離を置いて客観視する視座を構築しようとしている。そのために、証言の選定、切り取り、配置、〈地の文〉の削除、そして演劇的形象の付与という芸術的形式を用いて作家が介入している。あたかも劇の観客であるかのように、読者は、共鳴しあったり反発しあったりする証言群の姿を捉えながら、そのとき個別の苦悩や悲惨に沈潜してしまうことなく、むしろ全体を俯瞰する。その全体とは人類史的な破局という黙示録的な帰結を視野に入れることである。チェルノブイリ以後の世界で人間はいかに生きることが可能なのかという、未来に対する課題を追求することでもある。その新しい課題に対して、物語全体からイロニーとして浮かび現れてくるのは、人間であることがどういうことなのかという事態であった。

さて、『チェルノブイリ以後』だけでなく、『3.11以後』を生きている私たちは、すでにフクシマを想起することなしにチェルノブイリを語ることはできない。私たちは、フクシマの当事者になった時、チェルノブイリの当事者にもなっていたからである。チェルノブイリを捉えることができていない現代日本の死角は、フクシマや、核に覆われた世界に関する深刻な健忘症の徴候でもある。そういった点から、「補論 チェルノブイリ／フクシマ」では、木村朗子、アンヌ・バヤール＝坂井編著『世界文学としての〈震災後文学〉』という論文集を精査することで、現在のフクシマに関する知見を得て、そこにどのような問題系が横たわっているのかを考えている。文学作品の中で生の出来事としてのフクシマが構築され、またフクシマが身体感覚でとらえられることによって、人間が生態系の中の一つの種に過ぎず、人間や動物や植物の間の境界も消滅していくという経験を突きつけられる。フクシマの記

憶がそれ以前の歴史に遡及する端緒を与え、そもそも原発を生みだした近代の呪縛にも視線を向けさせる。そこからは、東北という辺境がいかに中央から収奪されてきたのかという差別の歴史も明らかになる。最後に、このような世界でいかなる解放の可能性があるかが探られている。チェルノブイリとフクシマという見取り図を描いたことで、その最も先鋭的な問題が明らかになる。それは、次の世代を守るために、どのように核に対峙すればよいかという問題である。そして、その解のひとつは、国家に全て委ねることなく、自ら注意深くリスク判定しながら、放射能に汚染された地で放射能と共に生きるという選択も存在するという事なのである。現にチェルノブイリの犠牲者たちは、かれらの生まれた地にもどって、そこですでに暮らし始めている。